

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520243

研究課題名(和文)：ヨーロッパ文化の移入者としての本間久雄

研究課題名(英文)：Honma Hisao as an Introducer of European Culture

研究代表者：平田 耀子 (HIRATA YOKO)

中央大学・総合政策学部・教授

研究者番号：00165177

研究成果の概要(和文)：この研究は大正時代におけるヨーロッパ文化の移入について本間久雄の活動を通じて考察したものである。本間久雄(1886-1981)は1886年(明治19)生まれ、坪内逍遙、島村抱月のもとで早稲田大学に学び、大正時代に文芸評論家評論家として活躍し、ヨーロッパの思想の移入に尽くし、転じて英文学、及び明治の研究者となった人物である。本間の活動を通じて、大正時代のヨーロッパ思想の移入の特徴を捉え、明治とも昭和とも異なるこの時代の時代思潮を明らかにする。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is to clarify the importation of European culture during the Taisho Period through the activity of Honma Hisao, who was born in 1886, studied at Waseda University under Tsubouchi Shōyō and Shimamura Hōgetsu. He was active as literary critic and engaged in importing European thoughts during the Taisho Period and later became a scholar specializing in English literature as well as Meiji literature.

Through Honma's activities, I attempt to grasp the characteristics of the importation of European culture during the Taisho Period in relation to the ethos of the time which is different from those of Meiji or Showa Period.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：(1) 本間久雄、(2) エレン・ケイ、(3) ウィリアム・モリス、(4) 比較文学、(5) オースカー・ワイルド、(6) データベース、(7) 英文学、(8) 明治文学

1. 研究開始当初の背景

本間久雄についてはすでにその「日記」を翻

刻し、ついで『本間久雄書誌』を作成中であった。この作業を通じて本間は長い生涯のうちでジャーナリスティックな文芸評論、歌舞伎評論、英文学研究、明治文学研究等多方面で活動したことがわかった。本間自身は、明治末から大正期の業績としてオスカー・ワイルド、エレン・ケイ、ウィリアム・モリスの紹介を挙げていることに注目した。筆者はもともと西洋史の研究者であり、ヨーロッパと日本の交流には常に関心があったので、明治末から大正時代のヨーロッパ文化の移入者としての本間久雄に研究対象を絞り、同時に『本間久雄書誌』の完成に向けてデータ収集した。

2. 研究の目的

本間の多方面の活躍のなかで明治末から大正時代のヨーロッパ文化の移入者としての業績に着目し、次の作業を当初の目的とした。

(1) オスカー・ワイルド、エレン・ケイ、ウィリアム・モリスの思想の移入者としての本間久雄の側面について考察する。

① 彼等の思想の概要とヨーロッパあるいはイギリス本土での位置づけについて検討する。

② 彼等の思想のどの部分がどのような経緯で移入されたのか、それはなぜか、その移入は日本の文化にどのような影響を与えたかについて考察する。

(2) 可能な限りのデータを収集し、本間久雄書誌を完成する。

3. 研究の方法

(1) 明治末から大正時代のヨーロッパ文化の移入者としての本間久雄を解明するにあたって、次のプロセスが案出され、ほぼこれに沿って研究を行った。

本間久雄がヨーロッパ文化の移入に携わる

ことになった経緯

① 本間久雄の生い立ち

② 師、坪内逍遙

③ 師、島村抱月

本間久雄のヨーロッパ文化移入の実態

① オスカー・ワイルド

② エレン・ケイ

③ ウィリアム・モリス

本間久雄のヨーロッパ文化移入活動の終焉

① ヨーロッパ体験と『滞歐印象記』

② 博士論文『英国近世唯美主義の研究』

③ 本間久雄のヨーロッパ文化移入

(2) 研究を行うに際して次の点に留意した。

① 本間久雄がその思想の移入に携わったオスカー・ワイルド、エレン・ケイ、ウィリアム・モリスの思想の全容とその本国での位置づけを把握するために、彼等の活躍の現場を訪れること。

② 本間久雄の生い立ちとその二人の師に関しては、できる限り原典資料を用い、聞き取り調査および現地調査を行うこと。

4. 研究成果

この研究の結果次のことがわかった。

(1) 本間久雄の幅広い活動のうちで、ヨーロッパ文化移入者としてのその全貌が明らかになった。

(2) 本間久雄のヨーロッパ文化移入活動を通じて、日本における文化移入活動についていくつかの傾向が明らかになった。

① 19世紀末から20世紀初頭にかけてヨーロッパ文化はゆるやかに構成された超国家的な知的空間を共有していたが、大正当時日本では留学体験のある少数者を除いて、その知的空間に対する理解を持たなかった。

② 紹介されたヨーロッパの思想家はいくつかのジャンルにわたって多方面な活躍をしている場合が多いが、紹介されたのは彼等の思想のほんの一部であった。

③ 思想の移入者は自らの問題意識に従って、且つ時代の要請に基づいて移入活動を行った。

(3) 大正期のヨーロッパ文化の移入は時代の要請に従って行われ、当時の時代思潮の形成に影響を与えた。

この研究は『大正時代のヨーロッパ―本間久雄の文化移入―』と題して総頁数 353 頁の完全原稿としてまとめられている。

まず比較的長い明治時代と昭和時代のあいだにあって 15 年という短期間であったためか、どちらかというとながしるにされてきた大正時代の特徴を概観している。

大正時代というのは、外国の圧力のもとに国家の存亡を賭けて、進んだ知識や技術を学び必死で戦った明治時代と、一応世界の強国と肩を並べるまで成長した日本が、関東大震災という未曾有の災害、昭和初期の大恐慌を経て、立ち位置の計算を誤り、厳重な思想統制のもとにまっしぐらに戦争に突入していった激動の昭和時代の間にはさまれ、根底に波乱を含みながらも表面的には自由で闊達な文化の華が咲いた時代であった。時代としての統一像を結ぶには短すぎた時代であったかもしれないが、太平洋戦争の戦後処理を担った世代を秘かに育み、マッカーサーによってもたらされた解放の予兆がいたるところに現れていた時代であった。リベラルで民主的な思想が許容されその代償として強力な政治的リーダーシップに欠け社会のひずみが意識され、解決不能な問題が山積する一方、若者の自由な創造力が解き放たれた時代、どことなく今の時代と似ている。

このような時代思潮を敏感に感じ取り表現し、同時に時代思潮の形成に貢献した人物

のひとりに、当時文芸評論家、ヨーロッパ思想の紹介者、翻訳者として活躍していた本間久雄がいた。この書は大正時代の本間久雄の足跡をたどり、当時のヨーロッパ文化の移入活動の諸相を大正時代の時代思潮の形成との関連において考察したものである。

目次は次の通りである。

目次

はしがき

凡例

第一部 本間久雄と二人の師

第一章 本間久雄―前半生とその時代

I ふるさと米沢の歴史と風土

II 家族と子ども時代

III 早稲田大学時代と結婚

IV マスコミデビューと文筆活動

第二章 師・坪内逍遙

I 憧れの師

II 『早稲田文學』をめぐる

III 本間の洋行と逍遙『沙翁研究彙』

IV 本間帰国後の交流

V 文学史上の坪内逍遙

第三章 師・島村抱月

I 洋行帰りの抱月

II 『早稲田文學』への寄稿と抱月の影響

III 抱月の死後・『早稲田文學』編集と「抱月全集」出版

IV 抱月の思い出と学問上の位置づけ

第二部 オスカー・ワイルド、エレン・ケイ、ウィリアム・モリスその思想と移入

第四章 オスカー・ワイルドと唯美主義

I 19 世紀末の唯美主義とオスカー・ワイルド

II ワイルドの移入と日本

第五章 エレン・ケイ「恋愛論」

- I エレン・ケイ：人と生涯
- II エレン・ケイ「恋愛論」のドイツ語訳をめぐって
- III エレン・ケイ「恋愛論」英語訳をめぐって
- 第六章 エレン・ケイ思想の移入
 - I 日本におけるエレン・ケイ「恋愛論」の移入
 - II 本間久雄による「恋愛論」の移入
 - III 本間久雄によるエレン・ケイ思想の紹介と普及
- 第七章 ウィリアム・モリスの社会改造論
 - I ウィリアム・モリス：人と業績
 - II 本間久雄とウィリアム・モリス
 - III 本間久雄によるウィリアム・モリス思想の紹介
- 第三部 ヨーロッパ留学と研究者への道
- 第八章 『滞欧印象記』
 - I ヨーロッパ留学まで
 - II 本間久雄のヨーロッパ体験
 - III 帰国後の仕事
- 第九章 『英國近世唯美主義の研究』
 - I 『英國近世唯美主義の研究』の完成へ道程
 - II 『英國近世唯美主義の研究』の内容
 - (1)：唯美派運動の起源
 - III 『英國近世唯美主義の研究』の内容
 - (2)：ワイルドと唯美主義
 - IV 博士論文『英國近世唯美主義の研究』の評価
- 第十章 19世紀ヨーロッパ文化の移入と本間久雄
 - I ヨーロッパの知的社会—19世紀後半から20世紀初頭にかけて
 - II 本間久雄によるヨーロッパ思想の移入活動の特徴
 - III 思想の移入と学問研究の移入
 - IV 本間久雄によるヨーロッパ文化紹介の

効果と影響

V 本間久雄とヨーロッパ文化移入活動 おわりに—グローバルな知の世界—

本年3月、出版を目指して中央大学出版部に出版申請書を提出したが東日本大震災のため手続きが滞っているのが実情である。

この成果の位置づけとインパクト：

(1) 明治時代のそれと比してこれまで研究が遅れていた大正時代の文化の研究であるということ。旧来、政治思想面については吉野作造の民本主義、平塚らいてう等の『青鞜』発行、武者小路実篤らの「新しい村」運動など、大正時代を代表する政治、社会思想として注目されてきた。本間久雄のヨーロッパ文化移入活動を検証した本研究は、これらに加えて、オスカー・ワイルドとイギリス唯美主義、エレン・ケイ思想、ウィリアム・モリスの社会改造論の紹介等が大正時代の時代精神の形成に寄与する過程も明らかにした。

(2) 本間久雄を取り上げたことで、作家と違ってその活動の痕跡をたどりにくい文芸評論家兼文化の移入者の時代に対する影響力を捉えることができたこと。

今後の展望：

今後大正時代が歴史研究の対象として扱われることはますます多くなるであろう。現在、中国における欧米文化の移入に関連して本間久雄研究が行われているが、欧米においても大正期における日本におけるヨーロッパ文化の移入の問題が注目されるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

①平田耀子、坪内逍遙と本間久雄、人文研紀要、査読無、70、2010、1—34

②平田耀子、島村抱月と本間久雄、人文研紀要、67、査読無、2010、349—384

③平田耀子、本間久雄：『英国近世唯美主義の研究』の出版とその前後、総合政策研究、査読無、18、2010、89—106

④Yoko Hirata, Oscar Wilde and Honma Hisao, the First Translator of *De Profundis* into Japanese, Japan Review, 21、査読有、2009、241—266

⑤平田耀子、ウィリアム・モリスと本間久雄、人文研紀要、査読無、66、2009、115—146

⑥平田耀子、本間久雄：『滞歐印象記』『英国近世唯美主義の研究』そしてそれ以後、査読無、49、2009、23—40

〔図書〕（計1件）

①横山彰、他、中央大学出版部、新たな「政策と文化の融合」総合政策の挑戦」2009、387—402

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平田 耀子 (HIRATA YOKO)
中央大学・総合政策学部・教授
研究者番号：00165177

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：